2017年8月19日（土）　インド大使館　ウパニシャッド（第18回）

**＜ウパニシャッドの内容とは＞**

我々はカタ・ウパニシャッドを勉強していますが、カタ・ウパニシャッドに入る前に、ウパニシャッドの内容とは何かを最初にお話しします。**ウパニシャッドの内容は「真理」です**。ウパニシャッドを表す言葉があります。

**Satyasya Satyam**（サッティアスィア・サッティアㇺ）

サッティア（satya）が真理です。Satyasya Satyamは「**真理の真理**」という意味です。英語にしますとTruth of Truthです。「真理」と「正しい」とは違います。私たちの生活には「正しい」と「嘘」があります。「嘘」と対比される「正しい」は相対的な真理又は普通の真理であって「絶対の真理」ではありません。

これに対して、永遠な正しさ、絶対的な正しさが「**絶対の真理（真理の真理）**」です。そしてウパニシャッドの内容は「絶対の真理」であり、カタ・ウパニシャッドの内容も同じです。

「真理」のイメージのためにもう少し詳しいことを言いますと、真理の本性は**サチダーナンダ（サット・チット・アーナンダ）**です。「**絶対の存在、絶対の知識、絶対の至福**」、それがサチダーナンダです。「**永遠**」、「**無限**」、「**自由**」、すべてはサッティア（真理）の本性です。

サッティア（真理）とは何か。これがウパニシャッド、バガヴァッド・ギーターのベースでとても基本的なことです。それを覚えないと進めないですから理解して覚えてください。

普通の存在、普通の知識、普通の喜びは「時間」と「空間」で限定されたものです。普通の存在は、或るときはありますが或るときはありません。「絶対の存在」はいつもあり、それだけではなく「無限」であり限度はありません。

普通の知識には限度がありますが、「絶対の知識」に限度はありません。普通の喜びは或るときはありますが或るときはありません。また苦しみが出ます。「絶対の至福」はそうではありません。いつもあり、そしてそれだけではなく無限です。

「絶対の真理」の特徴は「**永遠**」と「**無限**」（「時間」と「空間」で限定されない）と「**自由**」です。我々の自由は本当の自由ではないです。識別しますと分かりますが我々は奴隷の状態です。身体の奴隷、心の奴隷、感情の奴隷、サムスカーラの奴隷です。しかし、「絶対の真理」は「自由」です。それがウパニシャッドの内容です。

**＜ブラフマン、アートマン＞**

絶対の真理は、別の言葉で「**ブラフマン**」です。ウパニシャッドの中でいつもブラフマン、ブラフマンと言っています。ブラフマンの定義は何ですか。一番大きいものより大きい、それがブラフマンです。

想像してください、まず大きいものを。そして、それより大きいもの、もっと大きいもの、さらに大きいものという具合に。それを続けていくと或るとき想像できなくなります。本当は世界がどれくらい大きいかそれも知らないのです。

例えば、海がどれくらい大きいか想像できないですね。逗子海岸や葉山海岸から見ますとそれほど大きくないと感じられます。しかし、船で海の中をずっと進んでいきますと周りすべてが水だけになります。そうすると海がどれくらい大きいか想像できなくなります。

海よりも地球の方が大きいです。地球より空の方が大きいですね。空よりもっと大きい星もあります。ですから宇宙がどれくらい大きいかを想像できるでしょうか。しかし、もし想像することができたとして、その想像できたものよりも大きいものがブラフマンです。

ブラフマンの言葉の意味は「一番大きいものよりも大きく、一番小さいものよりも小さい」です。これは私たちがブラフマンを理解しやすくするための表現です。ブラフマンは本当は無限であり限度がないです。無限の説明はできないです。それがブラフマンです。

カタ・ウパニシャッドの中のテーマはブラフマンです。我々はどうしてカタ・ウパニシャッドを勉強しますか。その勉強は我々とどう関係していますか。ブラフマンと私とはどんな関係がありますか。

**ブラフマンと同じ存在が我々の中にも存在しています**。それは「**魂**」の形で存在しています。それをサンスクリットの言葉で「**アートマン**」と言っています。「ブラフマン」と「アートマン」はカタ・ウパニシャッドの中にも出てきます。皆さん覚えてください。

マクロ・レベル、一番大きい偉大なレベルで「ブラフマン」と呼ばれる存在は、我々人間の中に「**アートマン**」の形、「**魂**」の形、「**内なる自己**」の形で存在しています。「アートマン」は個人的なレベル、ミクロ・レベルですが、同じ存在がマクロのレベルで「ブラフマン」です。

**＜ウパニシャッドの勉強と人生との関係＞**

我々がウパニシャッドを勉強する目的はブラフマンを理解することですが、それはブラフマンを悟ることと同じことです。目的が一緒です。そしてもし理解しますとどうなりますか。どんな結果が出ますか。その質問は「勉強のやる気」のために大事です。

**ブラフマンを理解しますとすべての苦しみ、悲しみがなくなります**。それがより実践的な結果です。皆さんの**人生に関係**しています。皆さんにとって苦しみ、悲しみは大変ですからその問題を解決したいですね。そのことを理解すれば、「勉強のやる気」が出ます。

ウパニシャッドの勉強は、知的・学術的な（academic）興味だけではなく、本当は**人生に関係しています**。苦しみ、悲しみがなくなります。「苦しみ、悲しみがなくなる」は否定的な表現ですが、肯定的には「嬉しい、喜びが出る」でありその限度はありません。

皆さん一番大変なのは苦しみ、悲しみですが、我々には存在の問題もあります。我々はいつかは亡くなります。自分がもし亡くなりますとどんな状態になるのかわかりませんから、いつも皆さん怖いですね。しかし、ブラフマンを悟りますと存在は永遠になります。

しかし、悟りたいという希望だけでは悟らないです。それのために何が大事ですか。どんな条件がありますか。どんな障害がありますか。それもカタ・ウパニシャッドの内容です。

**＜カタ・ウパニシャッドPart 1 – Chapter 1 第３節（復習）＞**

前回の話は何でしたか。或る家住者である聖者が天国に行きたいという願いでヤッギャー（儀式）を行うことにしました。天国での楽しみは普通の世界の楽しみよりたくさんあり、それが長く続きます。しかし、天国での至福は永遠ではなく限度もあります。

天国へ行くためのヤッギャーには条件があります。それは、自分のすべての富を捧げないといけないという条件です。ヤッギャーを行う司祭、招待したブラーミンたちや他の偉大なお客様に寄付のようにしてあげないといけません。

ヒンドゥー教の伝統的な一番偉大な贈り物は雌牛です。なぜなら、雌牛からミルクがたくさん取れ、ミルクからはバター、ギー、ヨーグルトができます。それらを摂取すれば力が出ます。それだけではなく、儀式のときのお供えにたくさんのバターが必要です。

その聖者は良い種類の雌牛をあげないでとてもとても駄目な種類の雌牛をあげていました。そうしますと、その儀式の厳しい条件に従っていません。その条件を満たしていないです。その結果で天国に行かないだけではなく、地獄に行く可能性があります。なぜなら、知っていて、意識を持ってそうしていますから。良い種類の雌牛をあげたくないために。

その聖者の息子がナチケータです。ナチケータは若いですけれども、とても賢く、とても純粋で、とても霊的、道徳的なです。霊的なレベルはとても高いです。ナチケータはお父さんのそのやり方を見てとても悲しんでいます。それだけでなく心配しています。

もしお父さんがそのように寄付をあげますとお父さんは天国に行かないだけでなく地獄に行く可能性がありますから。しかし、お父さんを直接批判するのは難しいです。「お父さん、あなたのそのやり方は良くない」とは言えないです。お父さんに尊敬を持っていますから。

それで間接的に言いました、「お父さん、私もあなたの富です。あなたは私をどなたにあげますか。寄付をされますか」と。前回はそこまで話がありましたね。今から第４節が始まります。

**＜カタ・ウパニシャッドPart 1 – Chapter 1 第４節＞**

「カタ・ウパニシャッド カタカナ読み表示と日本語解説」（以下、「日本語解説テキスト」と略称）の第４節のローマ字表記を見てください。［最初にマハーラージが少しずつ唱えて皆がそれに続き、最後にマハラージと皆が一緒に全体を通しで唱える］

*sa hovāca pitaraṁ tata kasmai māṁ dāsyasīti；*

*サ　ホーヴァーチャ　ピタラㇺ　タタ　カスマイ　マーㇺ　ダースャスィーティ；*

*dvitīyaṁ tṛtīyam taṁ hovāca mṛtyave tvā dadāmīti.*

*ドゥィティーヤㇺ　トゥリティーヤㇺ　タㇺ　ホーヴァーチャ　ムルッティヤヴェー　トヴァー　ダダーミーティ*

節の中で２語が一緒になって１語になっている部分（例えば、hovāca はha + uvāca、dāsyasītiはdāsyasi + iti）などがありますので節の言葉を分けます。

*saḥ ha uvāca pitaraṁ tata kasmai māṁ dāsyasi iti；*

*dvitīyaṁ tṛtīyam taṁ ha uvāca mṛtyave tvā dadāmi iti.*

それでは意味を説明します。saḥは「彼」すなわちナチケータ、ha uvācaは「言いました」、pitaraṁは「お父さんに」です。tataは「お父さん」、kasmaiは「どなたに」、māṁは「私を」、dāsyasiは「渡しますか」です。

dvitīyaṁは「二回」、tṛtīyamは「三回」です。ナチケータはお父さんに一回質問しました。そして同じ質問を二回しましたがお父さんは答えてなかったですね。お母さんは黙って聞くだけ（笑い）。息子はいたずらっ子だと思ってお父さんは何も答えていませんでした。

おかしいでしょう、自分の息子をどなたにあげますかという質問は。特別な前後関係があってナチケータはその質問をしていますが、その儀式の条件に自分の家族を他の人にあげてくださいという条件はないです。寄付の条件にそこまでのことはないです。

しかし、状況が特別でしたからナチケータは言いました、「私もあなたの富です。あなたは私をどなたにあげます」と。その質問は普通ではないですからお父さんは聞いても聞かないふりをして無視していました。なぜなら、いたずらっ子の質問だと思ったからです。

そして最初も二回目の質問にも答えませんでした。三回同じ質問をされてお父さんは怒りました（笑い）。怒って何と言いましたか。「mṛtyave tvā dadāmīti」と言いました。mṛtyaveは「死神」、tvāは「あなたを」、dadāmiは「寄付をします」です。「私はあなたを死神にあげます。寄付をします」とお父さんは言いました。本当に怒っていますね。

ここで少し内容と離れますが、節を読むときの注意点をお話しします。一つの節の中に対話（例えば、ナチケータとお父さんの対話）が入っていますが、それを表すための引用符（“ ”）、コンマ、ピリオドは使われていません。読むときにそのことに気を付けないといけません。同じ節の中に質問と答えの両方が入っています。

内容に戻ります。どうしてナチケータはそのことを言いましたか。なぜなら、お父さんのやり方は正しいやり方ではなかったですから、それは非道徳的なやり方でしたから。しかし、ナチケータは、お父さんが死神にあげるとまで言うとは思わなかったです。

お父さんは怒って死神にあげると言いましたがナチケータはそこまで考えてなかった。普通は言わないですけれどもけんかのときに悪い言葉を使いませんか。ありますね。ですけれども、そのことを言われても素直には受け取らないですね。本当は意味がないですから。

ときどき、お母さんは怒って息子、娘にそのことを言ってないですか。とてもいたずらっ子の息子にお母さんは怒って「出て行ってください」、「そのような息子の顔は見たくない」と言っていませんか。しかし本当に見たくないですか。一時的な怒りで言った言葉ですね。本気で言っていません。そして本当に息子が出ていきますとお母さん、お父さんは困りますね。

お父さんは怒ってそのことを言いましたけれど本気で言った言葉ではなかった。しかし、ナチケータはお父さんの言った言葉を素直に受け取りました。なぜなら、その言葉はお父さんの口から出ましたから。お父さんからそう言われてナチケータは自分の中にいろいろな考えが始まりました。それが次の第５節です。

**＜カタ・ウパニシャッドPart 1 – Chapter 1 第５節＞**

［日本語解説テキストの第５節を見ながら、最初にマハーラージが少しずつ唱えて皆がそれに続き、最後にマハラージと皆が一緒に全体を通しで唱える］

*bahūnāmemi prathamo bahūnāmemi madhyamaḥ；*

*バフーナーメーミ　プラタモー　バフーナーメーミ　マッディヤマㇵ；*

*kiṁ svidyamasya kartavyaṁ yanmayā’dya kariṣyati.*

*キㇺ　スヴィッディヤマッスャ　カルタヴィヤㇺ　ヤンマヤーデャ　カリシュャティ*

先ほどと同じように節の中の言葉を分けます。

*bahūnām emi prathamaḥ bahūnām emi madhyamaḥ；*

*kim svit yamasya kartavyam yan mayādya kariṣyati.*

bahūnām emi prathamaḥは「皆さんの中で（例えば、子供や弟子の中で）私は一番です」、bahūnām emi madhyamaḥは「（もしそうでないとしても）私は真ん中のレベルです」という意味です。ナチケータは、私は一番上のレベルと考えます。もし、そのことに異議を唱えられたとしても、私は少なくとも真ん中のレベルです。一番低いレベルではないです。

yamasya kim svit kartavyam（語の順序を変えています）は「ヤマ（死神）は私に何をしてほしいのだろう」という意味です。もし私がヤマのところに行きますとヤマはどのように私を使うのでしょう。yan mayādya kariṣyatiは「私はヤマのために何の仕事ができるのだろう」という意味です。ナチケータはそのことがわからない。

ナチケータはどうしてそのことを考えていますか。お父さんは私を死神にあげると言いましたからその考えは始まりました。もし私は死神の場所に行きますと、私は死神のところで何をします。死神は私をどのように使います。それがわからない。

bahūnām emi prathamaḥ bahūnām emi madhyamaḥをさらに説明します。ナチケータは、私は皆さんの中で一番、そうでなくても皆さんの中で私は真ん中のレベルと考えました。それはナチケータの自信です。そう考えるとき何が「基準」になっていますか。

何の基準で一番上のレベルかどうかを決めますか。例えば、自分の息子を考えてください。良い、まあまあ良い、良くない、と言うときに皆さんにはどんなイメージがありますか。

自分の子供がどれくらいのレベルであれば素晴らしくそうでないとあまり良くないとイメージしますか。皆さんはその基準にどんなイメージをお持ちでしょうか。［お子さんを持つ参加者に質問し、回答には、サットワ的、非利己的、神様への強い思い、ポジティブな心、などが挙がりました］

自分の息子、娘について考えましたが、自分のお父さん、お母さんに対する自分の振る舞いはどうですか、その考えも大事です。自分の息子、娘に対しては厳しい基準ですが、自分のお父さん、お母さんについての自分の振る舞いはどうでしょうか。それも一緒に考えた方が良いです。それが深い考えです。

自分の息子、娘に対して厳しい基準なのに、自分はお母さん、お父さんをあまり構いません。これが良くないです。そしてこれが大事な点です。それは理想的なことと言わずに考えてください。ナチケータはとても理想的でしたでしょう。

**＜ナチケータが考えた基準とは＞**

ナチケータは自信がありました。私は皆さんの中で一番です。どうして一番か、何が基準になっているのか、その説明はないですけれど、私（マハーラージ）の考えたことをお話しします。

一つは「**道徳的**」であることです。皆さん、自分の息子、娘、孫が生まれたときにそれを思い出してください。また、ここにヨーガの先生たちもいますから、生徒にカウセリングなどで助言するときにそのことを思い出してください。これは大事なことです。

しかし、「道徳的」だけでは十分でありません。もう一つは「**霊的**」（スピリチュアル）であることです。「霊的」とは簡単に言いますと、一時的なものだけではなく「永遠」なもののことを考えることです。そのように息子、娘をトレーニングすることが大事です。

そのことを覚えて育てないといけません。子供のときからそのようにトレーニングしてあげないとそのようには育ちません。そうしないと後で失望します。私の息子、娘は、それくらい駄目になりました、と。一つ例を使います。最近よくあることです。

お母さん、お父さんは、自分の息子に「あなたは他の友達のことを考えなくてもいいですから、自分の勉強をどんどん進めてください」といつも助言しています。とてもとても利己的なフィーリングばかりです。

他の友達を手伝いますとその人の結果はあなたより進む可能性がありますから、そうしないで最初は自分のことを考えてください。子供のときにそのような利己的なフィーリングが始まりますと、その子は大きくなったときにお母さん、お父さんの面倒を見ません。

お母さん、お父さんは最初から「**非利己的**」になることの大切さを教えていないですから、その種類の子供たちは後でお母さん、お父さんの面倒を見ていません。奥さんや子供の面倒だけ見ています。最近の大きな問題です。

それだけではなく、自分も齢を取ったお母さん、お父さんの面倒を見てないです。お金はありますけれどあまり面倒を見ていない。それもたくさんあります。そうしますと自分の息子、娘も私が齢を取った後に私の面倒を見ないでしょう。そのとき悲しいですね。

それで私はトレーニングが大事ですと言っています。そのために一つは「道徳的」であることが大事です。「道徳的」は「非利己的（unselfish）」と同じです。例えば、次のような一つの物語があります。

或る男の子がいつも盗みを働いていました。その子は自分のお婆さんと一緒に住んでいました。自分のお父さん、お母さんはいませんでした。その盗んだものや盗んだお金を持って帰りお婆さんにそれをあげていました。

お婆さんは盗んだことを聞いても何も批判していませんでした。反対していませんでした。大丈夫と言っていました。やがてお巡りさんがその子を逮捕しました。それで裁判が行われその男の子に罰が科されることになりました。そのときお婆さんも裁判所に来ました。

その男の子は「お婆さん来てください、一つ話があります」とお婆さんを呼びました。「小さい声で話しますから」と言われてお婆さんは男の子の近くに来ました。すると、その子はそのお婆さんの耳を嚙みました。それで血が出ました。

そのとき、その男の子は言いました、「お婆さん、私はずっと前から盗んでいました。あなたも知っていました。しかし、一回もあなたは反対していなかった。そのために私は罰を受けました」と。

お婆さんは前から知っていました、その男の子が非道徳的になっていることを。けれども、お婆さんは一回も良くないとは言っていません。最近はときどきお母さん、お父さんも同じ状態です。子供があまりよく仕事をしていなくても反対しないで黙っています。

「道徳的」であることが大事です。そして「霊的」であることも。もう一つは、「**お母さん、お父さんを尊敬**」することです。しかし、お母さん、お父さん自身が道徳的にならないで、息子、娘から尊敬されたいと思うのは正しい希望ではありません。

お母さん、お父さん自身が道徳的にならないといけません。そうしないと息子、娘は自分を尊敬しない可能性がありますね。自分が正しいか正しくないかを内省せずに、息子、娘に自分の言うことを聞かせようとして彼らがそれを聞かなくても批判しない方が良いです。

なぜなら、自分が本当は完璧になりたくなかったからです。息子、娘が自分を尊敬するためには、自分が完璧にならないといけないですね。そうしますと、彼らはお母さん、お父さんを尊敬します。それだけではなく「**お母さん、お父さんをお世話**」します。

それが「基準」です。もう一回言います。「**道徳的**」、「**霊的**」、それから「**お母さん、お父さんを尊敬**」（お母さん、お父さんの言うことを聞きそれに従う）、「**お母さん、お父さんをお世話**」、ナチケータが考えた（であろう）一つの基準です。

もう一つの基準は、先ほど参加者の方が言われたことですが、サットワ的が一番良いレベル、ラジャス的がその次のレベル、タマス的が一番低いレベルという基準です。

もう一つの基準はグルと弟子について当てはまる基準です。その基準は、お母さん、お父さんと息子、娘についても当てはまります。その基準とは、グルが口で言わなくてもそのことを心で理解して想像して行うのが一番の弟子ということです。口で言ったことに従うのが次のレベルです。一番低いレベルは言っても従いません（笑い）。それがまた別の基準です。

弟子がグルのことを、息子、娘がお母さん、お父さんのことを集中して考えますと、彼らが何をしてほしいかがわかりますからそれをすることができます。口で言わなくても考えてそれをします。それが一番の弟子であり、一番の息子、娘です。

そのようないろいろ基準でナチケータは自分が一番上のレベルだと考えました。そして、もしそうではなくても、私は真ん中のレベルであり、私は絶対に一番低いレベルではないと考えました。ですけれども、お父さんは私に言いました、「あなたを死神にあげます」と。

お母さん、お父さんが怒って息子、娘にそう言うのは彼らが悪いことを言ったり悪い生活をしているときです。しかし、ナチケータは悪くないですよ。ですから、どうしてお父さんが私にそのことを言ったのかとナチケータは思いました。

ナチケータはお父さんが怒ってそのことを言ったのがわかりましたけれども、お父さんの口から出たということもわかりました。お父さんの口から出ましたから従わないといけないと考えました。これが特別な息子の証です。一番上のレベルの息子ですから。

間違っていても怒っていても言いましたので私は息子ですからそれに従わないといけない。そうしないとお父さんの言ったことは嘘になります。それは罪になります。従うことは大変ですけれどもそうしないとお父さんの言ったことは嘘になるとナチケータは考えました。

もちろん、怒ったのは一時的ですね。お母さん、お父さんはときどきけっこう怒りますが、怒ってもあまり続けてないでしょう。そのことを皆さん知っていますね。怒っても一時的ですぐ忘れています。愛はまた戻っています。

ナチケータのお父さんもそうですね。ですけれども、ナチケータは死神の場所に行くための準備を始めました、旅ですからね。準備を始めたのを見て、お父さんは「どこに行く？」と尋ねました。ナチケータは「死神の場所に行きます」と答えました。

お父さんは「どうして死神の場所に行く？」と尋ね、ナチケータは「お父さん、あなたは言いましたから」と答えました。お父さんは「私は言いません」と反対しましたが、ナチケータは「お父さん、あなたは怒って言いましたでしょう。私は絶対にあなたの言うことに従わないといけないです。あなたの口から出ましたから」と答えました。

それでお父さんはとても悲しんでいます。ナチケータが死神の場所に行くためにやいろいろ準備しているのを見てお父さんはとても悲しんでいます。節には書かれていませんがその意味が入っています。

そしてお父さんの悲しみはより一層深いです。なぜなら、死神の場所に行きますと戻らないですから。そこは親戚の場所ではないでしょう。親戚なら遠くでも絶対戻ります。死神の場所に一回行きますと戻らないです。それでとても悲しんでいます。

お父さんがとても悲しんでいるのを見てナチケータはお父さんをなぐさめます。それが次の第６節です。

**＜カタ・ウパニシャッドPart 1 – Chapter 1 第６節＞**

［日本語解説テキストの第６節を見ながら、最初にマハーラージが少しずつ唱えて皆がそれに続き、最後にマハラージと皆が一緒に全体を通しで唱える］

*anupaśya yathā pūrve pratipaśya tathā’pare*；

*アヌパッシャ　ヤター　プールヴェー　プラティパッシャ　タターパレー；*

*sasyamiva martyaḥ pacyate sasyamivājāyate punaḥ.*

*サッスャミーヴァ　マルティヤㇵ　パッチャテー　サッスャミーヴァージャーヤテー　プナㇵ*

先ほどと同じように節の中の言葉を分けます。

*anupaśya yathā pūrve pratipaśya tathā apare ;*

*sasyam iva martyaḥ pacyate sasyam iva ājāyate punaḥ*

ナチケータのお父さんも聖者でした。聖者でしたが本当は賢い人ではないですね。なぜなら、寄付のために駄目な雌牛をあげていましたから。聖者にもいろいろなレベルがあります。ナチケータのお父さんは低いレベルの聖者です、少しおかしいですけれども。

息子はいろいろ説明しています。お父さんをなぐさめるためです。どんな言葉でなぐさめましたか。「お父さん、見てください」と言っています。anupaśyaの意味は「見る」ですが、普通の「見る」ではなく「観察する」（observe）です。

yathā pūrveは「あなたの先祖、偉大な先祖はどのようにしていましたか」です。例えば、約束をしますと彼らはその約束に従いましたか、従いませんでしたか、あなたの先祖がどうであったかを考えてくださいと言っています。

それから、pratipaśya tathā apareです。pratipaśyaも「見てください（観察してください）」です。pratipaśya tathā apareは「（偉大な先祖のやり方だけでなく）現代の偉大な人のやり方も観察してください、そのやり方とも比べてください」という意味です。

sasyam ivaは「植物、草みたいに」という意味です。pacyateは「なくなる、れる」です。sasyam iva ājāyate punaḥは「植物のようにまた生まれます」です。普通の人は植物が萎れるのと同じように亡くなる運命にあり植物のようにまた生まれると言っています。

**＜第６節の２つのポイント＞**

この節には２つのポイントがあります。一つ目のポイントは自分のやり方が正しいか正しくないかを決めるのに、偉大な人が同じ状況のときにどうしていたか、その視点で考えてくださいということです。偉大な先祖と自分のやり方とを比べてくださいと言っています。

普通の人はいつも非道的ですから参考にしては駄目です。あなたが道徳的、霊的になりたいのなら、その種類の人の例は使わないでしょう。あなたは本当は良い人だったら良い人の例に従ってください。低いレベルの人に従う方が楽だからそのやり方に従うというやり方はしないでください。

先祖の中に偉大な人がいましたね。その人は同じ状況のときどうしましたか、それを思ってください。また現代の偉大な人のやり方も見て自分のやり方と比べてください。それで自分のやり方が正しいかどうかを決めてください。

お父さんの口から「あなたを死神にあげる」という言葉が出ましたが、それは本当は「約束」になっています。いったん口から出ますと絶対従わないといけません。怒って言ったとしても間違って言ったとしてもです。それは本当に厳しいです。自分が困っても従います。自分が困っても言葉を守ります。

その例が聖典の中にいくつもあります。例えば、叙事詩ラーマーヤナの中にあります。その物語をお話しします。

ダシャラタ王はカイケーイー妃に約束しました、「あなたにもし願い事がありますと私は絶対にそれを満足させます」と。その約束をして後、カウサリヤー妃（ダシャラタ王の別の王妃）に生まれたラーマに王位を継がせようとしたとき、カイケーイーは「ラーマを１４年間森に送ってください。私の息子バラタが王様になります」と王に言いました。

ダシャラタ王はそれに従わざるを得ませんでした。カイケーイーの願いを満足させると約束していましたから。とても悲しいことですがそうしないといけない。それで息子ラーマはお父さんの言葉を守るために森に入りました。ダシャラタ王は悲しみのあまり死んでしまいました。

これは言った言葉を守る例えになっています。私は間違って言いましたとは言わないです。怒って言いましたとは言わないです。後で考えると前のことは正しくなかったから守らないとは言わないです。それくらいとても理想的な例えです。

ですから、とてもとても気を付けて言ってください。おしゃべりだと、考えずにたくさんたくさん言います。たくさんおしゃべりしますとたくさん嘘を言う可能性があります。無駄なこと、嘘のことの可能性がありますので会話をコントロールすることが大切です。ここでのポイントではありませんが、それは一つの教えです。

お父さんをなぐさめるためにナチケータは、「お父さん、あなたは偉大な先祖のやり方と比べてください。同じ状況のときに先祖はどうしていました」と言っています。困っても、いったん口から出た言葉を守らないといけなかったですね。それくらい厳しかった。

なぜなら、我々の人生の目的が真理を悟ることであれば、正しいことを実践しないと真理を悟ることは全くできないですから。真理を悟るための一番の条件は正しいことを言うことです。いつも嘘を使っていますと真理の勉強と正反対になります。

シュリー・ラーマクリシュナもそのことにとても厳しかったです。シュリー・ラーマクリシュナはマザー・カリーに仰っていました、「おおマザー、母なる神様、私は何でもあなたに捧げます。例えば、知識と無知、その両方をあなたに捧げます。そのように私のもの全部をあなたに捧げます」と。

しかし、真理、正しいこと、真実（truth）をマザー・カリーに捧げるとは仰いませんでした。なぜなら、真理はシュリー・ラーマクリシュナ御自身の霊的な実践のベースだったからです。ですから、嘘を使わないことは真理の勉強をしたい人のためにとてもとても大事です。

ナチケータは、「お父さん、同じ状況のとき、現代の偉大な人、昔の偉大な人はどうしていましたか。その方たちのやり方と比べてください」と言いました。やり方はいつも言葉を守ることです。ですからお父さん、あなたも言葉を守ってください、と言っています。

第６節の二つ目のポイントは普通の人は植物のようだということです。植物、草は生まれます、育ちます、それで最終的になくなります。無数の植物がありますがその状態変化はどれも同じです。特別なことは何もないです。普通の人はそれと同じようだと言っています。

偉大な人は普通の人と少し違います。例えば、ラーマチャンドラ、クリシュナ、ガンジーさん、リンカーンさん、弘法大師といった人たちですね。しかし、普通の人は植物と同じ状態ではないですか。プライド、うぬぼれがあって自分を特別な方、偉大な方と考えますが。

ですから、普通の人には従わないでください。普通の人のやり方はとても普通ですから。例えば、嘘を使います、非道徳的です、欲張ります、うぬぼれがたくさん。偉大な人と普通の人、道徳的な人と非道徳的な人、そのように分けますと違いがよくわかります。

ナチケータの話に戻ります。ナチケータは言いました、「普通の人のことを考えれば、たくさんの人が生まれて亡くなり、また生まれて亡くなっています。それは変わらないことです。だから、あなたは私のことを気にしないでください。私もその中の一人なのですから」と。

そしてナチケータは「私は今亡くならなくても後で亡くなります。絶対に亡くなります。ですから今亡くなってもあまり構いません。あなたはそのことを理解して悲しまないでください」と付け加えました。そのように息子はお父さんをなぐさめました。

バガヴァッド・ギーターの中にも同じアイデアがあります。第２章第２７節です。

　*Jātasya hi dhruvo mṛtyur dhruvaṁ janma mṛtasya ca* */*

　*ジャータッシャ　ヒ　ドゥルヴォー　ムリッテュル　ドゥルヴァン　ジャンマ　ムリタッシャ　チャ /*

　*Tasmād aparihārye’rthe na tvaṁ śocitum arhasi //*

　*タスマード　アパリハーリエールテー　ナ　トヴァン　ショーチトゥム　アルハシ //*

　*なぜなら、生まれた者は必ず死に、死んだ者は必ず生まれるからだ。だから必然で避けられぬことを、君が嘆く必要などさらさらない。*

もし生まれますと絶対亡くなります。亡くなりますとまた絶対生まれます。そのようにサイクルしています。そしてクリシュナは「アルジュナ、あなたは悲しまないでください」と言いました。なぜクリシュナはそう言いましたか。

なぜなら、アルジュナは戦いを避けたかったからです。戦いの敵と見方は皆親戚でした。もし戦いが始まりますと殺さないといけないです。殺される人の中には、お爺さんも孫も友達もいます。その人たちは皆親戚ですからとても悲しいです。

そこでクリシュナは言いました、「アルジュナ、普通の人は生まれます、育ちます、亡くなります、また生まれます。それは普通ですから悲しまないでください。皆さん同じですから」と。ナチケータは、「お父さん、我々の状態はみんな同じで、生まれ、育ち、亡くなり、また生まれます。それは普通ですから悲しまないでください」と同じ論理を使いました。

**＜カタ・ウパニシャッドPart 1 – Chapter 1 第７節＞**

［日本語解説テキストの第７節を見ながら、最初にマハーラージが少しずつ唱えて皆がそれに続き、最後にマハラージと皆が一緒に全体を通しで唱える］

*vaiśvānaraḥ praviśatyatithirbrāhmaṇo gṛhān*；

*ヴァイッシュヴァーナラㇵ　プラヴィッシャティヤティティルブラーフマノー　グリハーン；*

*tasyaitāṁ śāntiṁ kurvanti hara vaivasvatodakam*.

*タッスャイターㇺ　シャーンティㇺ　クルヴァンティ　ハラ　ヴァイヴァスヴァトーダカム*

節の言葉を分けます。

　*vaiśvānaraḥ praviśati atithiḥ brāhmaṇaḥ gṛhān ;*

*tasya etām śāntiṁ kurvanti hara vaivasvata udakam.*

vaiśvānaraḥは例えば「火」です。atithiḥは「お客様」ですが、日本語の「お客様」という言葉はとても包括的な意味で使われます。知らない人にもお客様と言いますし、顧客にも、家に来た人にもお客様を使いますので、ここでは「ゲスト」と訳します。

praviśatiは「入ります」、atithiḥは「ゲスト」（上記）、brāhmaṇaḥは「ブラーミン」、gṛhānは「家に」です。全体で「ブラーミンはゲストとして家に火のように入ってきました」です。

tasyaは「その人を」、etām śāntiṁは「喜ばせる」、kurvantiは「してください」、haraは「持って行ってください」、vaivasvataは「ヤマ」のこと、udakamは「水」です。

ナチケータがどのようにしてヤマの場所に入ったかはわかりません。飛行機で、新幹線で、船で、それはわかりません。聖典の中にもありませんし、注釈者も書いていません。ナチケータはヤマの場所に入りますとヤマはいませんでした。ヤマも家住者でしたから親戚のところに行ったのかもしれません。

ゲストはとても大事な人です。そのことはまた説明します。ヤマのところにはヤマの奥さん、召使、親戚などがいましたから、ナチケータにどうぞ水を飲んでください、休んでください、食べてくださいと勧めます。しかし、ナチケータはまず最初にヤマに挨拶をしたかった。お父さんは私をヤマにあげましたから。

ヤマを待つ３日間の間、ナチケータは水も飲まず、食事もせず、寝も休みもしませんでした。それでヤマが戻ってきますと親戚は皆とても怖がってヤマに告げました。

「ヤマ、その若い人は火のようでした。火のように明るく輝いていてスピリットがとても高い方です。そのゲストが３日間あなたのために待っていました。待たせたことでゲストが怒りますとあなたはすべてのものを失います。ですからあなたはすぐに行ってゲストを喜ばせてください」

ゲストを喜ばせるのにする最初のことは水を持って行くことです。水があれば、飲むことができますし、足を洗うことができます。お世話の一番最初はまず水です。インドでは訪ねてきたお客さんが足、手、顔を洗うように水を用意します。それでフレッシュになります。

日本のレストランに行きますと以前は最初におしぼりが出ました。しかし、最近はだんだんそれもなくなってきました。最近は紙になってしまい私は残念です。私が日本に来た当初（２１年くらい前）はありました。おしぼりはホット、それで皆さんフレッシュになります。同じことです、水でフレッシュ。

さて、ゲストは特別な存在ですが、ブラーミンのゲストはもっと特別です。それは次回お話しします。

以上